

『象徴の貧困』

（ベルナール・スティグレール著、新評論、2004年、2006年翻訳）読書メモ

◆「象徴の貧困」という言葉

南北問題といわれるものがあって、昔から言われながら、現在もまったくといっていいほど解決されていなくて、それは言わば、南の国々の「物質的な貧困」の問題なのですが、それでは、文明国は、物質的に比較的恵まれていて問題はないかということ、そういうわけでもなくて、でもそれは何かと言われるとなかなか説明できなかつたりします。この本は、その問題に真正面から取り組んでいて、それが「象徴の貧困」という言葉で表現されているわけです。

著者は、フランスのメディア政策を主導する立場にある人で、近年、文明国で蔓延しているこの問題の解決に向けて積極的に活動している哲学者です。

ということで、極簡単に「象徴の貧困」の具体像に迫ってみましょう。

◆物があふれているのに心が満たされないのはなぜ？

物があふれて、やりたいことは何でもできるように思えるのに、でも、「本当の自分」や「私らしさ」をはどこにあるんだろう？と疑問に思ったときに、私たちには、テレビによるコマーシャルやインターネットという便利な機械があって、「あなただけの」「特別な」「限定の」具体的な商品を即座に提供してくれます。その商品には、「この商品を使えばなれる未来の自分」の像が宣伝文句の中やイメージ映像の中にセットになっていて、自分で考えるという瞬間も与えられないままに、その商品を消費することになります。そんなことを繰り返していくうちに、私たちは、だんだんに、予定通りのものを望み、予定通りの行動を行うようになって、最初の「本当の自分」や「私らしさ」という出発点からかけ離れて、ますます自分らしさを失っていくことになります。

そういう私たちの姿を、著者は、フェロモンによって、個体の意思とは関係なしに分業によって巨大な社会を形成している蟻塚になぞらえて、デジタルフェロモンに操られている現代の人間というような表現をしています。

◆生きにくい現代社会

自分らしさを失っても、それで幸せならいいのかもしれませんが。「みんな」と同じ事をして、同じようなことを考えて、同じような商品を買って（ほとんどすべてそれらは、消費行動になっています）。しかし、私たちはやはり、自分になり損ねて生きづらくなり、本来は社会的に適正に発露されるべき欲望の行き場がなくなり、ついには突発的な事件を起こしてしまうことあるのです。現在、ワイドショーなどで取り上げられる事件の多くの背景には、こういうことがあるように思えます。そしてその危険性が、ますます高まっているのではないかと考えられます。

◆私らしさ＝個別化は、プロセスの中にしかない

「私らしさ」は、実は、確固としたものとして、答えのように用意されている（ましてや、既成の商品の中にある）ものではなくて、探し求めていく途中であったり、他人との関係の中で徐々に見つかっていくもので、そういう意味で、プロセス（過程）の中にしかないものです。

◆自己肯定感なしに、他者を愛することはできない

そして、その自分を求める欲望にしたがって、丹念にプロセスを経ることによって、（将来にわたって）変わり得る自分を発見し、ある意味自信を持つことができるようになるのです（最近自己肯定感＝セルフエスティームの講座がはやっているのにはこういう背景があると思われます）。そうやって自分をちゃんと評価することができてこそ、他人を愛することができ、社会とつながっていくことができるのではないのでしょうか。

プロセスを経るということは、それほど特別なことではなくて、誰でもできることで、ただ、その機会（時間）が、現代の消費社会によって奪われているということなのです。

◆現状を恥ずかしいと思うことから

現在石油価格が高騰して、石油資源がやがて底をつくことを意識せざるをえないような状況ですが、このまま「象徴の貧困」が続くと、精神という資源が枯渇してしまう。著者は、あらためて持続可能な欲望を生み出せるような、技術・産業・経済・政治のあり方を模索することを呼びかけ、そういった精神のエコロジーのための第一歩として、「文明国」に今果てしなく蔓延する「象徴の貧困」という現実を「恥」として感じることから始めようとしている。